

# 中国映画『芙蓉鎮』に見る人間関係

花澤聖子

## 1、はじめに

この映画<sup>1</sup>は、第一回茅盾文学賞を受賞した古華の同名の小説を阿城が脚本化し、謝晋監督の下で映画化されたものである。

物語の舞台となる「芙蓉鎮」（芙蓉町）は、湖南省の南の端にあって、広東省と広西壮族自治区とも境を接する農村地帯にある小さな町だ。そこで、月に6日、市の立つ日に米豆腐を出店で売る器量よしの胡玉音が主人公である。経済調整期に当たる63年から始まり、文革が終了し改革・開放期が始まった79年までの激動の時代を、人々が苦悩しつつも生き抜く姿を胡玉音を中心に生き生きと描いている。映画作品として高い評価を受け、1987年に金鶏賞を受賞し、1988年にはカルロビ・ヴァリ映画祭グランプリも受賞している。

この町は実在しない架空の町であり、主要登場人物も8名ほどしかいない。しかし、この映画が「この裏側には幾千万の同じような人がいる」<sup>2</sup>という共感を人々に与え、時代を代表する傑作という評価を得られたのは、その少ない登場人物の一人一人が、ストーリーの中で、上級幹部や下級幹部、新参幹部と古参幹部<sup>3</sup>、黒五類や紅五類、知識人、庶民など、その典型としての役割を果たしているからだと言えるだろう。それぞれの人間関係と、背景となる周辺の人々や大衆の姿も強い実在性を持って細やかに丁寧に描き出され

---

<sup>1</sup> この映画は164分の全長版と132分の短縮版の2バージョンが製作されており、本論では全長版に基づいて分析を加えている。

<sup>2</sup> この映画のDVDの作品解説の中で紹介されている謝晋監督の言葉。

<sup>3</sup> 建国前から革命に身を投じた幹部のこと。古参幹部に対し新参幹部は建国後幹部になった人々を指す。

ているのも、この映画の特徴である。

今日、改革・開放政策の下で、経済発展を続ける中国社会で、血縁関係や地縁関係、同族や宗族といった伝統的人間関係が大きな役割を果たしていることが注目されている。特に農村では顕著だと言われる。これらの伝統的人間関係は、一般的には、度重なる政治運動や社会主義建設によって消滅した、あるいは弱まったと見られてきた。本当に、伝統的人間関係は、改革・解放期前の社会において消滅もしくは弱くなっていたのだろうか。

本稿では、こうした問題意識を根底に持ちつつ、この映画の中に見られる人間関係を、血縁関係、地縁関係を中核とする伝統的人間関係と、人民と階級敵、新参幹部と古参幹部、上級と下級の関係など、共産党の一党独裁下における社会主義的人間関係という二つの視座において分析し、双方がどのような係わり方をしているのか、その様相を明らかにするとともに、政治運動や文化大革命が、この二つの人間関係にいかなる形で関わっているのかを考察する。

## 2. 政治的背景とあらすじ

この物語は、経済調整政策がとられていた 1963 年に始まる。この時期、毛沢東の大躍進政策のマイナス面と、3 年にわたる自然災害が招いた深刻な経済危機を乗り越えるために、劉少奇・鄧小平らによる三自一包政策<sup>4</sup>が推進され、農村市場が復活していた。芙蓉鎮も経済的活気を取り戻し、主人公の胡玉音も、夫の黎桂桂と夜も寝ずにくず米をうすで引き、得意の米豆腐造りをして、市の立つ日に出店を出していた。店は味と器量よしの胡のサービスで繁盛した。

それに対し、味も衛生状態も悪い国营食堂にはお客が全く入っていない。支

---

4 自留地、自由市場、損益を個人で責任を負う企業を多くし（三自）、一戸毎に農業生産を請け負わせる（一包）政策。

配人の李国香は、米豆腐店の繁盛振りを、胡の色気によるものと苦々しく思っていた。また、自分が心を寄せる古参幹部の谷燕山も、自分が声をかけても国营食堂には寄らず、胡の店に行き、胡と親しそうにしていることに嫉妬する。谷は人民公社の食糧倉庫を管理する主任である。しかし、まもなく李は、芙蓉鎮を管轄する県の党委員会書記である叔父の力で、県の商業局の課長となって芙蓉鎮を去っていく。

このころ、党中央において、大きな変化が起きていた。大躍進政策の失敗で、政治の第一線を退いていた毛沢東が、62年には再びその指導権を行使し始めていた。毛沢東は、社会主義段階においても資本主義の復活の恐れがあるとして、階級闘争の継続が必要であるという継続革命論を唱えた。その実践として一部の農村と都市の基層単位で、62年末から63年にかけて社会主義教育運動<sup>5</sup>が実施され始める。この運動は、農村では、主に「四清運動」として展開され、人民公社における労働点数、帳簿、倉庫、財産の再点検が行われた。こうした運動の波が芙蓉鎮にも押し寄せて来ることになる。

李は、この運動を芙蓉鎮で行うために工作组<sup>6</sup>の指導者として県から派遣されてくる。この頃、胡は米豆腐で稼いだお金で家を新築し、1500元の貯蓄も持っていた。李は、町で大会を開き、先ずブルジョアで右派分子の秦書田をつるし上げ、次に秦に政治スローガンを書かせている大隊支部書記の黎満庚を暗に批判する。つまり、敵と見方をはっきり区別していないのは党支部書記の立場を喪失しているというのだった。しかし、その根底には、胡と

---

5 経済調整期において社会主義のあり方について不満を高めていた毛沢東は、「前十条」と言われる農村工作に関する方針を示し、農村で社会主義教育運動を行い「階級闘争」を大きく推進すべきだと主張した。社会主義教育運動の中心的任務は「四清運動」だったが、その他の目標として階級敵に対する闘争、社会主義思想の教育、貧農・下層中農協会の組織化、幹部の集団労働参加が掲げられた。これに対し、劉少奇に代表される実権派は「後十条」と言われる農村工作方針を出して対抗し、階級闘争的側面を押さえて政治的混乱を避けようとした。後に、この運動は文化大革命へとつながっていく。

6 上級指導幹部が下級機構に臨時的に一定の期間派遣し調査、監督又は指揮を行うチーム。

義理の兄妹関係を結び、親しくしていることへの腹いせもあった。そして、米豆腐で儲け家を新築した胡についても、資本主義の道を歩むものとして批判する。李は、谷も胡の色気に溺れて、人民公社のくず米を大量に売ったと勘ぐり、「資本主義の道を支持している幹部がいる」と暗に批判する。胡はまさに、資本主義復活の典型として階級闘争の標的にならんとしていた。

不穏を感じた胡は、米豆腐を売って貯めた 1500 元のお金の没収を恐れて、それを義理の兄妹関係を結ぶ満庚<sup>7</sup>に預ける。そして、夫の桂桂<sup>8</sup>の提案で、批判を避けるために江西省の夫の親戚に身を隠す。満庚が、胡のお金を預かったことを知った妻の五爪辣は、半狂乱で三人の娘を守るために、胡から預かったお金を工作組に差し出すように懇願する。結局、満庚は胡から預かった 1500 元を工作組に届け、胡を売ることによって党への忠誠を示し、胡に連座するという満庚一家にとっての最悪の事態を免れる。

胡が批判を避けるために江西省の夫の親戚に身を隠している間に、夫の桂桂は李の命を狙った罪で処刑されてしまう。所属する人民公社発行の戸籍証明書がないため、夫の親戚の所にも居られなくなった胡が芙蓉鎮に帰ってきて見ると、夫は処刑され、胡に人民公社のくず米を大量に売った谷は公安に連れて行かれ軟禁されていた。県の党委員会は谷に対し、停職と自己批判の提出という決定を出す。谷は李の圧力にも屈せず自己批判を拒む。しかし、結局停職処分となってしまう。満庚も自己批判と学習のために県に行かされる。そして胡自身も、人民の敵とされる黒五類の一つである新富農に再区分される。

大隊支部書記の満庚の秘書をしている王秋赦は、解放前は雇農で、土地改革で積極的に党に協力した人物だ。この度の運動でも、李に積極的に協力す

<sup>7</sup> 黎満庚を黎桂桂と区別するために、以下省略した書き方を姓ではなく満庚と名前で書くこととする。

<sup>8</sup> 黎桂桂を黎満庚と区別するために、以下省略した書き方を姓ではなく桂桂と名前で書くこととする。

ることで、後に李の後ろ盾で入党し、満庚に代わって大隊党支部書記となる。再教育のために県に行っていた満庚は芙蓉鎮に戻ってきて、かつての自分のポストに就いている王の秘書となる。李は今回の運動で成績を上げる。

やがて文化大革命が起こり、县委常委委員で人民公社書記になっていた李も「偽者の左派」と批判され、紅衛兵に芙蓉鎮の町中を小突き回される。この時、王は紅衛兵と一緒に李を小突き回し、「李国香を打倒しろ」というスローガンも出させる。しかし、李は上層部の計らいで復権し、今度は県の革命委員会常務委員となり、かつ芙蓉鎮の人民公社の革命委员会主任、つまり再び人民公社のトップの地位を得て、芙蓉鎮に住むことになる。それに驚いた王は李の機嫌を取り、李に対する忠誠を誓い、末は李と男女の関係を結ぶ。

反動右派の秦と新富農の胡は、二人で芙蓉鎮の通りを掃除するうちに、愛情が芽生え結ばれる。胡の妊娠を契機に結婚願いを出す、認められないばかりか、裁判で「反革命現行犯」として秦は懲役10年の刑に処せられてしまう。胡は、懲役3年の刑に処せられるが、妊娠中ということで執行猶予となり、大衆監督下の労働処分となる。

10年にわたる文革が終了し、改革・開放期に入って、胡も秦も共に名誉回復し、没収された新築の家もお金も返される。李は省の幹部と結婚し出世し、王は改革・開放政策への180度の転回についていけず、気がふれてしまう。

まとめると、主な登場人物は胡玉音、秦書田、李国香、王秋赦、谷燕山、黎満庚、五爪辣、黎桂桂の8人である。

### 3 登場人物に見られる社会主義的人間関係の構図

#### 3-1 人民と敵の関係

資本主義社会に生活する人々にとって、「国民」という言葉とは違い、「人

民」という言葉は普段使われることがない耳慣れない言葉である。しかし、社会主義国家では、元来、国家の成員を人民と敵に分類し、それぞれに対し異なった政治的処遇を与えていた。

中華人民共和国でも、改革・開放期以前においては、人民と敵という政治的カテゴリーがあった。人民と敵に分けて人を見る観点は、この時代の中国社会における人間関係を規定する根底にあったものである。それを共産党が強要していたからであり、政治運動が推進された時期や文革期などは、特に自らを守るためにも敵と一線を画する意識を強く持たざるを得なかった。

解放後の中国では、土地改革で地主の土地を農民に等しく分配し、都市でも生産手段の国有化を進めて社会主義改造を行うことによって、経済的意義での階級は消滅した。しかし、毛沢東思想を信奉する中国共産党は、階級を政治的意義で捉え、出身家庭などを基に、人々に階級的身分を与え、「人民と敵」に区分した。敵と見なされる階級は、解放戦争のころから、政治的戦術に基づいて変化してきたが、この物語が始まった 1963 年段階では、「地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子」が黒五類と呼ばれ、人民の敵、階級敵と見なされていた。

「右派分子」とされる人々は、百花斉放・百家争鳴で、共産党批判を行ったとされる知識人を中心とする党外人士であり、反右派闘争の結果、新たに「人民の敵」として加えられた人々である。

主な登場人物のうち、階級敵に分類されるのは、右派分子の秦書田と新たに富農に分類された胡玉音である。

李の説明によると、秦は、「民謡収集や反封建の歌曲や舞踊をつくると称して党や社会主義をひどく攻撃した」人物である。主人公である胡玉音は、よく働き技能を活かしてお金を貯め、家を新築するなど生活を向上させた本来経済調整期の優等生なのだが、毛沢東路線の巻き返しの結果、李に資本主義の道を歩むものとされ、新たに富農に認定されてしまった人物だ。

階級敵としての黒五類は、後に裏切り者・スパイを加えて7類となり、やがて、実権派とブルジョア知識人を加えて9類に増える。知識人は、「九番目の鼻つまみもの」(臭老九チョウラオチヨウ)と呼ばれた。秦は文革期には、ブルジョア家庭出身で、右派分子であることに加えて臭老九チョウラオチヨウの範疇にも入る人物となる。

文革前夜の社会主義教育運動のために工作組のリーダーとして芙蓉鎮にやって来た李は、点検運動の報告大会で、右派分子の秦を壇上に呼び出して立たせ、「この階級敵に憎しみを持たないのか」と町の人々や基層幹部を叱咤する。階級敵には好意や親しみを示してはならず、階級敵はひたすら憎悪の対象とすべきだとされた。

階級敵に分類されると、政治的な差別はもとより、進学、就労などで差別を受けると同時に、人格的侮辱、肉体的責め苦に合う。文革期には、迫害が特にひどかった。

秦の能力を頼りにスローガンを書かせていた満庚が、敵に対する態度をはっきりさせていないと、その政治意識の低さを問題視され、自己批判と学習を強いられた様に、階級敵に係わるといつ巻き添えになるかわからなかった。

胡が運動の標的になっていることを知ると、昨日まで喜んで米豆腐を食べにきていた人々も、皆、胡と係わることを恐れ、通りで擦れ違っても目を合わすことすら避けて通っている。実際、胡自身も、自分が新富農に区分され、黒五類になったのを知らず、夫を亡くし悲嘆にくれながら墓場にやってきたとき、心配して後をつけて来た秦に、「近づかないで、この右派」と言って石を投げたこともある。

文革の最中、胡と秦が二人だけの婚礼を行おうとした夜、彼らの昼間の動きからそれを察知した谷が、二人を訪れる。谷は、「自分のほかに来るものもないだろう」と言って、媒酌人を買って出るのが、「二人を結びつけた本当の媒酌人はあの石畳と竹箒だ」と語っている。階級敵に分類された人々

や政治運動で冤罪を被った人々は、同じ境遇にあるもの同士、同じ階級敵同士で助け合うよりほかに、親密感を持つようになっていくことを象徴している。秦は病気になった胡の看病だけでなく、病に倒れた富農の孫などの面倒も見ている。

黒五類に対し、「よい階級」とされた人々がいる。「労働者、貧農・下層中農、革命幹部、革命軍人、革命烈士」であり、紅五類と呼ばれ、文革期にはその子女も紅五類と呼ばれた。黒五類とは対照的に紅五類に区分された人々は、ただそれだけで「よい階級」としてあらゆる面で優遇を受けた。

王は旧社会において雇農で、階級区分では貧農に当たる。怠け者で文化程度が低く、人格的にも極めて卑しい人間として描かれている。国営飲食店の売り物を勝手に摘まむ、胡に出店を出すための土地を貸しているからと、米豆腐を常にただ食いする、「役人が来ても茶も出さないのか」と役人風を吹かせる、胡の胸を見ながら卑猥なことを言って、夫の桂桂に「ばか者」と言われてつばを吐きかけられるなど、あちらこちらの場面で、教養と品性のなさが示されている。しかし、紅衛兵が町にやって来た際も、李は打倒されたが、「これからは貧農、下層中農が主役だ」と王の方は「同志」とされた。

この映画では、王という人物を通して、「紅五類」であればそれだけで「よい階級」、「よい人物」とする階級区分だけで人を決定付ける考え方に、痛烈な批判を加えている。

### 3-2 幹部と知識人

秦は出身家庭がブルジョア階級で、以前は県の文化会館の館長をしていたが、社会主義批判をしたとして反右派闘争で労働改造の処分になり、芙蓉鎮に住むようになった人物である。普段は「ボンクラ」とあだ名が付くほど、自分の才気を隠しているが、知識人として政治を理解し、生きる知恵と術を知っている人間として描かれている。李と秦の間には、毛沢東路線を歩む幹



部と知識人の敵対的關係を見ることが出来る。

文革期に入って新富農にされた胡は、秦に向かって、自分の不幸は桂桂との婚礼の際に祝い歌を披露してもらったり、新築の家の入り口に貼る対聯を書いてもらうなど、あなたに係わったせいだと言って泣く。秦は、そんな胡に、「闇夜が明ければ、鬼も出なくなるよ」と言う。意味がわからず、胡はきょとんとするが、この比喩的言葉には、知識人である秦には、今、社会がなぜこのような状態にあるのか、なぜ文化大革命が起こったのか、政治と社会を客觀的に見つけ、分析できる力があることを示している。

秦のような知識人は、解放後の社会でも必要とされる知識や技能、技術を有していた。秦が、黒五類分子であるにもかかわらず、満庚が彼を頼りにしてスローガンを書かせていたのは、彼のようにきちんとした字体でスローガンを書ける技術を持った人が他にいなかったからである。つまり、政治的には階級敵としつつも、現実の生活の中では、彼らの知識や技術は活用され頼りにもされていた。しかし、文革はこうした幹部と知識人の關係に、終止符を打つものだった。

一党独裁政権の下では、知識人が政治に参与したり批判する余地はなかった。政治を理解し、独立した思考力を持つ知識人は、1956年のハンガリー事件や百花斉放・百家争鳴に示される如く、毛沢東にとって共産党の一党独裁を揺るがす危険な存在だった。また実際に、建国後、指導幹部の地位に着いた農民出身の革命家と、科学技術方面に携わった旧社会の教育を受けた知識人たちとでは、政治的立場や思想の持ち方が明らかに違っており、対立が生じていた<sup>9</sup>。それ故に、文革の際に、知識人たちは反動學術權威として「走資派」について次に批判されるべき対象とされたのだった。1968年夏以降、「労働者がすべてを指導しなければならない」と宣伝され、知識人は総

---

<sup>9</sup> 国分良成編著『中国文化大革命再論』、慶應義塾大学出版会 2003、p.79

体として「9 番目の鼻つまみ者」とされ、階級敵に入れられたのである。

李は県の幹部であり、工作组指導者として芙蓉鎮に来た際に、「絶対に階級闘争を忘れてはならない」というスローガンを出している。李も叔父も毛沢東党路線を歩む幹部であることがわかる。李は、秦を階級敵として位置づけ、文革中、胡との結婚願いを出した秦を「革命をなめている」と裁判にかけ、「反革命現行犯」として懲役 10 年の刑に処してしまう。胡は最初の夫の桂桂を処刑され、二度目の夫も 10 年という長い年月、夫婦でありながら李に引き裂かれることになる。

### 3-3 指導幹部と積極分子

国営食堂の支配人をしていたときの李は谷に夢中で、いつもだらしがない格好をしている王を全く相手にしていなかった。しかし、県から政治工作组のリーダーとして芙蓉鎮にやってきた李と、大隊支部書記秘書の王の間には、指導者と積極分子の間のギブ・アンド・テイクに基づく功利的関係が生まれたことを見出すことができる。

李が工作组として点検調査を行い、運動の成果を上げるには、地元の基層幹部の協力が必要である。王は、紅五類分子であり、土地改革の際にも党に協力した「よい階級」の人間である。そして、運動の受益者でもあった。王自身このことに味を占めていることが、「李班長、土地改革と同じですね。いわば、第 2 の土地改革…」という台詞によく表れている。

久し振りに芙蓉鎮にやって来た李を見かけた時に、急いで出迎え荷物を持つなど、李に対し献身的な態度を示す。李からすれば、自分が成果を上げるための協力者として王は格好の人物だった。王は芙蓉鎮の個人の金持ちとか、「幹部の不正」といった李のほしそうな情報を言われるままに積極的に提供する。その結果、李は、社会主義教育運動と四清運動の「成果」を手に入れ、出世へと結び付けていく。王は情報を提供した見返りとして、社

会的ステイタスとなる党籍を手に入れ、満庚に代わって大隊支部書記となる。

組織的手順としては、芙蓉鎮にやって来た工作組は、大隊支部書記の満庚に情報を求め、彼から報告を受けるのが筋である。しかし、実際には、満庚の頭越しに、党支部書記秘書の王から報告を受けている。満庚からは積極的な協力や李がほしいような「報告」は得られないからである。

その後、王は、文化大革命の初期、县委常委委員で人民公社書記となっている李を、紅衛兵と共に町中を小突き回す。「李は県党委員会書記の叔父さんの後押しで出世したがもう終わりだ」と言って、町に「李国香を打倒せよ」というスローガンを出せと秘書の満庚に命令する。このことから、王と李の関係がいかに関係的であったかがよくわかる。しかし、李は上層部の決定で間も無く復活し、今度は県の革命委員会常務委員兼人民公社革命委员会主任となって芙蓉鎮に戻って来る。慌てた王は、李の側近の「李主任に気に入られるようにきちんとしたら」というアドバイスを聞いて床屋に行き、身なりも整えて夜遅く李を訪問する。そして、恩を仇で返した自分は人間以下だと謝罪する。しかし、李の態度がはっきりしないのを見ると、更に、李主任が出張している間に芙蓉鎮には新しい動きがあり、谷燕山が町の通りで大声でわめき主任の悪口を叫んでいたと誣告する。李が自分を必要とする状況を作るためである。王の思惑通り、李の表情は急に変わり、谷のような人間にこの町を牛耳られたくないと言い、王に今度の運動で力を見せてくれたら専従幹部<sup>10</sup>に抜擢すると言う。王は、「これからはあなただけにお使えます」と言って忠誠を誓う。その後、この二人は男女の関係を結んでしまう。

### 3-4 新参幹部と古参幹部・上級幹部と下級幹部

谷は解放戦争に身を投じた古参幹部である。古参幹部にとって新中国は、

---

<sup>10</sup> 国から給料を支払われる幹部のこと。農村や町で活動する末端幹部の多くは非専従の幹部である。

まさに自分たちの命がけの戦いの末勝ち取ったものである。谷は、実際、解放戦争で負傷し、不能となっていた。「不孝有三，无后为大」<sup>フシヤオヨウサン ウーホウウェイター</sup>（親不孝に三つあり、後継ぎがないことを最大の不孝とする）を伝統的価値とする中国社会で、子孫が残せない体になってしまったというのは、あまりに大きな代償だった。

李と谷の関係には、上級幹部と下級幹部という構図と共に新参の幹部と古参の幹部の構図を見ることができる。工作組が開いた町の大会で、秦が右派として李につるし上げられ、満庚が暗に批判され、次に自分が、「資本主義の道を歩む露天商を支持している幹部がいる」と暗に批判された時に、谷は立ち上がって「トイレだよ」と言う。このことに、参加者がどっと笑う。李は、面子を失い、怒りに顔をゆがめる。

谷には、自分たちが並々ならぬ犠牲の上に新中国を創ったという大きな自負と誇りがある。李は新参の幹部だが、谷の上級幹部だ。しかし、地元の古参幹部である谷は威信と風格を持ち、町で人々の尊敬を得ている。谷から見れば、李が優れた業績もないのにコネで出世し、上級幹部となって町にやってきたのだ。面白いはずがなかった。命令でスローガンを書かされているだけにすぎない秦について、「町の政治宣伝の大権を握っている」と言い、「敵と味方の区別をつけずに過ちを犯している幹部がいるが、自分の立場はどっちか」などと言われても、それは実生活の中で実感のないものだった。

そもそも、庶民にとっても政治運動は現実の生活の中で意味を持ったものではなく、ばかばかしいものだった。五爪辣の「食べて寝てそれだけでも大変なのに、毎日政治運動に開け暮れてさ」という台詞に、庶民の政治運動に対する思いが代弁されている。炒める油がなく、五は食事を作る時にいつも野菜を茹でている。この映画の中の物を食べるシーンで、肉を食べているのは、李と王だけである。

「トイレだ」と立ち上がり退出しようとした谷のこの行為は、古参幹部の意地として、李などの脅しに屈しない自分を示したかったとも取れる。この

行為は、ある意味で町の人々を痛快にしたかもしれない。しかし、李から見れば、上級幹部としての面子をつぶされ、自らの権威を踏みにじられたことになる。胡とは親しくするにもかかわらず、谷の気を引こうとした自分の思いに振り向くことがなかったことへの私怨も心の中にはある。

李は、上級幹部の権限で、谷を軟禁し自己批判を強要する。谷はそれに屈しなかった。しかし、李は、谷が胡と黎と秦と4人で、党の内外で結託して分派活動を行ったという罪をでっち上げる。それに対し、県党委員会の決定が下されて、谷は、停職処分となる。

解放戦争で死んでいった同胞、不能となった自分を考えると、解放戦争で夢見た新中国は何だったのか、停職になった谷は、絶望し、苦悩し、酒びたりとなっていく。谷は、命を懸けて戦った古参幹部たちの求めた新中国は、こんなものではなかったという苦悩と、捨てきれない新中国へとかける思いを代弁する役割を担っている。

谷はくず米を胡に売って私腹を肥やしたわけでもなく、何も不正なことを行ったわけでもない。李が勘ぐったように、胡と不義を通じたわけでもない。しかし、民主集中制<sup>11</sup>と「党が幹部を管理する」<sup>12</sup>という二つの組織原則は社会主義中国において絶対であり、一党独裁制の下で、国家権力は常に上級幹部によって体現される。上級に服従したとき、国家の政治権力が認められたことになる。従って、李は国家権力の体現者なのである。言い換えれば、李の権威に逆らうものはみな打倒されるべき対象となる。一端標的にされると、下級幹部や庶民は反論の余地がない。李は社会主義教育運動・四清運動を通して、私怨を晴らし、かつ運動の「成果」を上げ、地位を上げていくのである。

---

<sup>11</sup> 花澤聖子「中国の近代化政策下における幹部の腐敗現象に関する分析」『神田外語大学期用第16号』2004年、p.p.94 - 96 参照

<sup>12</sup> 「中国の近代化政策下における幹部の腐敗現象に関する分析」pp.93 - 94 参照

政治運動や文革は、中央において路線闘争や奪権闘争であっても、基層においては、その実質は政治性を失い、運動を利用しながら自己利益を追求し、対立する人間関係の構図の中で、私怨を晴らしたり、自らの権威に挑戦したり自らの権威の邪魔になる相手を打倒するチャンスとなっているという構図が、この映画から見えてくる。

## 4 登場人物に見る伝統的人間関係

### 4-1 義理の関係による家族関係の拡張

中国で著名な社会学者である費孝通は、1947年に『郷土中国』<sup>13</sup>という著作で、中国人の人間関係について、「池に投じてできる波紋のように、自己を中心に同心円状に広がっており、中心となる自己との親疎遠近の距離に応じて、異なる行動様式をとる」と指摘した。円の中心点を個とすると、石を投げた際に、波紋が起きている範囲にいる人が、個にとっての<sup>クアンシ</sup>関係圏内の人ということになる。関係とは中国語で、「人と人との結びつき」を意味し、人口の流動性の低い伝統社会において、血縁、地縁といった「縁」の原理に基づいた親疎遠近によって、中心となる個との<sup>クアンシ</sup>関係のあり方が決定付けられる。中国社会の人間関係において、<sup>クアンシ</sup>関係圏内に、信頼と、相互扶助の義務と責任が倫理観としてあり、その程度は、<sup>クアンシ</sup>関係が親密であればあるほど強くなる。

今日、中国社会の<sup>クアンシ</sup>関係について多くの研究があるが、<sup>クアンシ</sup>関係は親密感の強い順に、「<sup>チアレククアンシ</sup>家人関係」(家族や身内の関係)、「<sup>シューレンクアンシ</sup>熟人関係」(知り合い関係)、「<sup>ションレンクアンシ</sup>生人関係」(他人の関係)の3つの<sup>チアレククアンシ</sup>範疇に分類できる。<sup>14</sup>「<sup>チアレククアンシ</sup>家人関係」は家族を中核とした関

<sup>13</sup> 費孝通『郷土中国』三联书店、1985(1947)

<sup>14</sup> 楊国枢は、「関係」を親密感の強い順に、「家人関係」、「熟人関係」、「生人関係」の3つの<sup>チアレククアンシ</sup>範疇に分類し、それぞれの①行動原則②行動様式③相互依存の形態について分析して、理念型として次のように提示している。すなわち家人関係では、①は責任原則、②は全力庇護・高特殊主義、③は無条件相互依存、熟人関係では、①は人情原則、②は方法を講じた融通・低特殊主義、③は条件的相互依存、生人関係では、①利害原則、②は簡単なことは行方が特殊扱いなし、③は相互依存の義務と責任なしである。

係であり、相互に無条件で全力を尽くして扶助し合う責任と義務を持つ。最も親密で信頼度の高いかつ安定した関係である。資源などの授受においても特別扱いし、全面庇護する。それだけに人々は、「干亲<sup>カンチン</sup>」（義理の親族関係）や「结拜兄弟<sup>チエバイシウンテイ</sup>」（義理の兄弟関係）などを結んで、家族関係を拡張しようとしてきた。

この話の中でも、胡は満庚と義兄妹の関係を結んでいる。胡は養子を取ることを許可してくれるように書記の満庚に頼む。許認可において中国では、一般にすんなり事が進まないことが多いものだが、彼は一も二もなく快諾している。谷にも、その子の義理の父親になってくれるように頼み、谷も承諾している。これらの事から、胡は、谷や黎<sup>チアレクアンシ</sup>と家人関係に準じる極めて親しい関係であることがわかる。

胡が運動の標的とされたとき、夫の桂桂が反対したにもかかわらず、1500元のお金を胡が満庚に預けようとしたのは、彼が党员で復員軍人であることに加えて、「私の兄貴分」だったからである。そこに、深い信頼が感じられる。本来、満庚には義妹の胡を無条件で助ける義務と責任があり、全力で庇護するのが伝統的中国社会における倫理観だ。しかし、満庚は、妻に子供のためと泣きつかれ、更に党組から二日二晩脅かされた結果、工作组にお金を届けてしまう。もし、胡のお金を預かったことが発覚すれば、満庚一家は連座を免れ得ない。巻き添えになると、拘禁されたり隔離審査を受け、労働改造に送られ、一家は離散状態になってしまうからだ。自己利益を守るため、家族を守るために、満庚は妹分の胡に対する伝統的倫理観を放棄せざるを得なかった。その結果、満庚は、党籍を守り、大隊党支部書記秘書に降格されるだけで済んだものの、ずっと良心の呵責に苛まれる。「今の世の中、人を踏みつけたり、踏みつけられたりしないと生きていけないのか」という満庚の絶望に満ちたこの台詞に、当時の救いようのない世相がシンボリックに映し出されている。

それに引き換え、谷は地位も名誉も失ってしまったものの、妻も子供もな

い分だけ、自らの信念を曲げずに通している。胡に対しても、秦と胡の婚礼の媒酌人となったり、難産に苦しむ胡を見捨てることなく、解放軍の病院に運び込み、母子の命を助けるなど、できる限りを尽くして助けている。

大きなおなかで溝に下りてごみをさらったり、ごみの入った籠を背負う胡を、人目を憚りながらも手助けしている満庚、谷、五の姿に密やかにではあるが、できる限りの範囲で機能している関係が感じられる。

#### 4-2 親族関係

もう一つの伝統的人間関係を象徴しているのが、県の党委員会書記をしている叔父と李の関係である。

李は決して有能と言える人物ではない。李が支配人をする国営食堂には、谷が品質のいい食料を回していたにもかかわらず、味も衛生状態も悪く、お客が入っていない。胡の出店の繁盛振りを見て、若い店員ですらなんとかしようと、「支配人、うちも出店を出せば儲かりますよ」と提案しているにもかかわらず、こっちは国営だと胡坐をかき、李は何の手立ても取ろうとしていない。

支配人として何の業績がないにもかかわらず、叔父の後ろ盾で一気に県の課長に昇格している。このことは、李が「叔父さん、私の転職、なぜ許可されないの。県の党委員会書記の権限で何とかして」と言い、叔父が「もうすぐだ。県の商業局課長だ」と答えていることからわかる。これはまず異例の抜擢であり、出世である。

この出世は、「一人得道、イーレンダータオ 鶏犬升天」という諺に示されるように、一人チアレンクアンシが権勢を得れば、一族の者が力がなくても引き立てられるという家人関係による「高特殊主義」すなわち、特別扱いの表れである。能力に係わらず、かわい姪のためという感情性に基づく業績原理ならぬ属性原理による出世である。パーソンズのパターン変数を参考とするなら、チアレンクアンシ家人関係は、個別主義、



属性本位、感情性の強い関係ということになる。

李も叔父も毛沢東路線を歩む幹部であり、文革初期の紅衛兵運動による混乱した時期を除いて、李は芙蓉鎮を足がかりに順調に出世し、文革終了後の改革・開放期も、省の幹部と結婚し、運転手つきで高級車に乗る身分となっている。

一方、胡は、夫の親戚を頼って身を隠したものの、人民公社の戸籍証明書を取っていなかったために、長く滞在することができなかった。当時、農村戸籍と都市戸籍という二つの戸籍があって人々は自由に居住地を変えることはできなかった。この制度は、農村から都市への人口の流入を防ぐために作られた制度だ。戸籍制度が、本来可能だった血縁関係の助け合いの障害になっていることがわかる。当時の規定によると、農村戸籍から都市戸籍に転籍できる人は、年にわずかに0.15%に過ぎなかった。<sup>15</sup> 当時の人口流動性は、解放前の社会より更に低くなったと言われており、また移動できない故に、更に地縁関係を強めたとも言われている。

#### 4-3 よそ者幹部と地縁関係に見る<sup>シューレンクアンシ</sup>熟人関係

主な登場人物の中で、李と秦を除いて、その他の人はみな芙蓉鎮出身の人である。李と満庚、谷の三人は、いつも幹部会で顔を合わせる間柄だ。満庚の妻の五が文革中に谷を家に招き、満庚と谷が共に酒を飲む場面がある。満庚と谷は親密感を持った仲だ。しかし、李と満庚、谷の間には親密感が見られない。

李の叔父が芙蓉鎮にやってきた時に、李に「ここへ来てから長くなるが結婚はまだか」と聞いていることから、李が何年か前によその土地からやって来た新参の幹部であることがわかる。

---

<sup>15</sup> 李強『中国社会階層と貧富の格差』ハーベスト社、2004、p.12

谷に国営食堂で食べていくように誘うが断られ、その後、谷が胡の店に行っただのを目にした李が、胡の店に出向き、営業許可証はあるのかと詰問し、ないのであれば営業刺し止めだと言う場面がある。日本人の常識からすると、確かに営業許可証がないのに営業するのは違法だ。しかし、実際、今日の中国でも露天商などは、営業許可を持っていないことが多い。仲間内では、法や規則より人情が優先する社会だ。それを聞いて、そばにいた谷や満庚もその場の客も、みんな胡の見方をする。谷も、「いつも顔を合わせる仲だ。何かあれば役所で話そう」と決着を先延ばしにして、胡を助ける。いつも顔を合わせる仲なら、つまり、<sup>シューレン</sup> 熟人同士なのだから、そんな人情のないことを言うなという気持ちが裏にある。しかし、実際には、李の側からすれば、谷や満庚からそんな親しさは感じていない。満庚も、谷の意見に「そうだ」と相槌を打つと共に、「李さん、夜の幹部会の通知いった？」と聞く。すると、周囲のみんながどっと笑う。満庚の言葉の裏には、「そんな人情のないことを言うなんて、逆にあなたもよそ者だから、通知いってないんじゃないの」という意味が隠されている。だからみんなどっと笑ったのである。それに対し、李は、「よそ者だと思ってバカにして」と悔しそうに立ち去る。ここにはやはり、地縁の強さと、よそ者と土地の者という意識が強く見られる。よそ者の立場と孤立感が見て取れる。

李のこのくやしさは、上級幹部となって芙蓉鎮に再度やってきた時に、政治運動の中で見事に晴らされる。

## 5 結論

主な登場人物を社会主義的人間関係と伝統的人間関係という二つの視座で見た場合、以下の点を指摘することが出来る。

第一に、「4 登場人物に見る伝統的人間関係」で示したように、血縁・地縁を紐帯とする伝統的人間関係は、消滅したわけではなく、また単純にただ

弱まったとも言えない状況があるということだ。なぜなら、満庚は一家の生存をかけた状況下で断腸の思いで妹分の胡を裏切っているが、一方、李と叔父の間では関係は立派に機能しているからだ。

つまり、政治運動や路線闘争に巻き込まれないポジションにありさえすれば、伝統的人間関係が、出世など、資源を得る上で極めて有力に機能したということである。文革時の毛沢東夫人である江青の強い立場、王洪文の周囲を固めた36小兄弟<sup>16</sup>、周恩来に守られた養子の李鵬など、現実の政治の世界で伝統的人間関係が機能している例は枚挙に暇がない。しかし、忘れてはならないことは、劉少奇一家に見られるように、ある人が闘争の対象になった場合に、関係がマイナスに作用し、その人の家族や友人など関係圏内の広い範囲の人々が連座するというのも当然あるということだ。

従って、伝統的人間関係そのものが、消滅したあるいは弱まったという総合的な見方ではなく、関係がどのような個を中心とした時に機能可能なのか、また機能可能な条件とは何だったのかということに、着目すべきである。この映画を通じて、実態を把握するにはケース分けした分析が必要だということが分かる。

次に、社会主義的人間関係においては、人民と敵、新参幹部と古参幹部、指導幹部と知識人といった、対立的な人間関係が多く見られる。協力的関係は李と王の間に見られる指導者と積極分子の関係のみである。

人々を、「人民と敵」に分けて見る考え方は、人間関係を初めから分断してしまうことになる。共産党の一党独裁を守るという視点において、階級敵はどんどん増え、右派分子や走資派と知識人を加えて九類に増えていく。秦と胡、谷の関係からは、敵に分類された人々や政治運動の被害者となった人々が互いに陰ながら助け合い、親密感を育んでいっていることが見出せる。

---

<sup>16</sup> 廖志剛著、村上厚訳『私の体験した文化大革命』日新報道、1980、p.102

李と谷に見られる新参幹部と古参幹部の対立の構図には、「よそ者」と「同郷」という地縁に係わる伝統的人間関係が絡んできている。政治運動や文革が、基層において、その運動の実質性よりも対立する人間関係の構図の中で、運動を利用しつつ私怨を晴らしたり、対立者を打倒するチャンスとなっているということがこの映画から見えてくる。こうした例は、実際に農村で行われたフィールドワークによる調査からも報告されている<sup>17</sup>。

しかし、最も認識すべき事は、共産党による一党独裁下では、国家権力は、「民主集中制」と「党が幹部を管理する」という組織原則の下に、上級幹部が下級幹部に対し、国家権力の体现者としての意味を持っているということである。この物語の主人公は、胡玉音であるが、登場人物のそれぞれの運命を左右しているのは李国香である。この映画の中で、李こそが国家権力の化身となっていることがわかる。

そして、国家が社会的資源のほとんどを占有し、「単位」や人民公社を通して社会的資源を分配するシステムにおいて、「単位」や人民公社の指導者たちは、そうした資源の分配権をも支配する人間であるということだ。そこに、王のように権力にへつらう人間が生まれてくる。指導者は任務の遂行上積極的協力者を必要としている。一方、積極分子は自己の利益と発展を求めするために、指導者の要求に答え、忠誠を尽くして協力する。指導者は、その見返りとして、庇護と昇進、物質的・非物質的報酬を与えるのである。それは、関係に見られるような「親」という感情で結びついた私的人間関係ではない。しかし、フォーマルな組織原理に基づいたものでもなく、また、完全にフォーマルな人間関係から独立したものでもない、功利的なギブ・アンド・テイクの関係である。

Andrew.G.Walder や Jean.Oi の研究<sup>18</sup>によれば、「単位」の指導者と積極分

---

<sup>17</sup> 王銘銘『村落視野中的的文化与权力』生活读书新知三联书店 1997、p. 59

子や人民公社における人民公社員と農村幹部の間の庇護主義関係のネットワークが、「単位」や人民公社内において必要不可欠なものであり普遍的に存在したという。この映画の中では、王に対し権力を持ったものに媚びへつらったものという厳しい侮蔑の視線を送っているが、最も問われるべきは、指導者が、手にしている権力を何の目的でどのように使おうとしたのか、使ったのかという点にあると言えよう。

最後に、伝統的人間関係と社会主義的人間関係の係わり合いを考えたとき、血縁・地縁を中心とする伝統的人間関係は、個別主義的で閉鎖的であるため、よその土地からやってくる指導者と積極分子の独特な功利的関係は、生まれるべくして生まれた必然性の産物と言えるだろう。また、伝統的人間関係については、庶民や基層幹部のもつ<sup>クアンシ</sup>関係は、国家権力の体現者となる上級幹部によってたやすく踏みにじられてしまうが、党内のより高いポジションにある指導幹部や、<sup>イーバーショウ</sup>一把手（各部署の最高責任者、ナンバーワン）がもつ<sup>クアンシ</sup>関係は、時として極めて高い機能性を発揮できたということが指摘できる。

## 参考文献

- 孙立平「“关系”、社会关系与社会结构」、『社会学研究』1996、第五期  
郭于华「农村现代化过程中的传统亲缘关系」、『社会学研究』1994、第六期  
陆德泉「“关系”——当代中国社会的交换形态」、『社会学与社会调查』1991、  
第5期  
費孝通『乡土中国』三联书店、1985(1947)  
楊國樞「中國人的社會取向：社會互動的觀點」、楊國樞、余安邦編、『中國人的心理與行為：理念及方法篇』、桂冠圖書公司、1993

---

<sup>18</sup> Walder, Andrew G. 1986. Communist Neo-traditionalism: Work and Authority in Chinese Industry, Berkeley : University of California Press  
Oi, Jean c 1989. State and Peasant in Contemporary China: The Political Economy of village Government . University of California Press

黄光国「人情与面子：中国人的权力游戏」、杨国枢主编、『中国人的心理』、  
江苏教育出版社、2006

王铭铭『村落视野中的文化与权力』生活・读书・新知 三联书店、1997

佐々木・柄澤行雄編『中国村落社会の構造とダイナミズム』当方書店、2003

国分良成編著『中国文化大革命再論』慶應義塾大学出版会、2003

丸山昇『文化大革命に至る道』岩波書店、2001

廖志剛著、村上厚訳『私の体験した文化大革命』日新報道、1980

東方通信社編『中共の人民公社 実態と批判』明德出版社、1959

的心理與行為：理念及方法篇』、桂冠圖書公司、1993

黄光国「人情与面子：中国人的权力游戏」、杨国枢主编、『中国人的心理』、  
江苏教育出版社、2006

王铭铭『村落视野中的文化与权力』生活・读书・新知 三联书店、1997

佐々木・柄澤行雄編『中国村落社会の構造とダイナミズム』東方書店、2003

国分良成編著『中国文化大革命再論』慶應義塾大学出版会、2003

丸山昇『文化大革命に至る道』岩波書店、2001

廖志剛著、村上厚訳『私の体験した文化大革命』日新報道、1980